

■ ■

URL : <http://www.jass.ne.jp/>

■ ■

- [01] 卷頭言 ■

野田尚史 (大阪府立大学)

ウェルフェア・リングイストクスには、伝統的な言語科学とは研究テーマも研究目的も研究方法も大きく違うものが含まれます。研究テーマとしては、言語障害、アイデンティティ、情報機器など、伝統的な言語科学ではあまり重視されてこなかったものが含まれます。研究目的では、社会に向けて提言を行うためといった、伝統的な言語科学ではほとんど考えられなかった目的も出てくるでしょう。研究方法では、定量的な研究方法は諦め、定性的な研究方法に徹するといったこともあるでしょう。

1

そのような現実を考えると、ウェルフェア・リングイスティクスの研究でよい評価を受けるのは簡単なことではありません。たとえば研究方法について「科学的な手法に基づいていない」といった理由で否定的な評価を受けることも少なくないでしょう。

言語教育や言語習得に関連した研究を例にすると、次のようなことです。たとえば「相手により印象を持ってもらおうと思って使った表現がかえって相手によくない印象を与えてしまう」ことがあります。親しみを表したほうがよいと思い、「早くやってくださいね」と終助詞の「ね」を使ったところ、相手が「子ども扱いされた」と気分を害したというようなケースです。母語話者でもそういうことは起きますが、特に非母語話者にとっては深刻な問題です。

ウェルフェア・リングイスティクスの観点からは、「相手によくない印象を与える」可能性がある表現の研究は重要だと考えられます。たとえば「～ている」というアスペクト表現の習得といった文法的な研究より、社会に役立つ可能性が高いと思われます。

「～ている」の習得のような文法的な研究は、日本語能力が違うたくさんの学習者に「～ている」に関するテストをしたり、その人たちの発話や作文に出てくる「～ている」を分析するなどして、「科学的」な研究にすることが比較的簡単にできます。

一方、「相手によくない印象を与える」表現のような研究では、相手が使った表現を不快に思ったことがある人からその事例を詳しく聞き出すような調査が重要になります。その場合、そういう表現に敏感で、それをいつまでも覚えているタイプの人を経験した事例ばかりが集まるかもしれません。また、そのような事例を整理しても、体系的に分類できず、すっきりした結論が導き出せないかもしれません。ですが、そのような研究は言語教育に役立つことは多いでしょうし、むしろそのような研究のほうが有益かもしれません。

このようなウェルフェア・リングイスティクスの研究が評価されるようになってほしいと思います。そうなるようにするためには、当面、次の二つが特に大事だと考えます。

一つは、従来の言語科学の研究で実績のある研究者がウェルフェア・リングイスティクスの研究を積極的に行い、見本を示すことです。そういう研究者は、研究のどんな点が評価され、どんな点が批判されるのかを知っています。論文を評価してもらえらる形に整えるテクニックも持っています。従来の枠組みでは評価されにくいウェルフェア・リングイスティクスの研究を一定の評価が得られる研究に仕上げることはできるはずです。

もう一つは、論文の査読者など、研究を評価する立場になったときには、ある程度の欠点には目をつぶって、「この研究は社会に役に立ちそうだから、高く評価しよう」と、なるべく柔軟に、なるべく好意的に評価するようにすることです。研究を評価する人がそのような姿勢で評価しようという気になる仕組みを作ることも必要でしょう。

とはいっても、「おまえはそういう研究ができるのか?」「そういうふうに他人の研究を評価できるのか?」と聞かれると、ちょっと困ってしまいます。でも、そういうことができ、ウェルフェア・リングイスティクスの研究を盛り立てようという意志を持った研究者がどんどん増えていくことを願っています。また、自分もそうなりたいと思っています。

を明らかにし、それに準拠するということには十分な意味がある。しかし、学習者が直接接するのは、あくまでも名前と顔のある山田さんなり田中氏なりであって、「最大公約数的な日本人」なる存在とお付き合いをするわけではない。山田さんや田中氏の評価観が、「最大公約数的な日本人」の評価傾向とはかなりずれていることも十分想定できるのである。

そこで筆者は、「学習者の言語運用」を評価する際、一般の母語話者が使用している評価の観点・プロセスにどのような可能性がありうるか、を調査した上で、(1)見出された多様な評価観の中に類型を見つけ出すことができないか、(2)個人の中で「評価観の切り替わり」が起こりうるとしたらそれはどのようなときか、(3)個人の評価観は、どのような外的・内的要因によって生成されるのか、などのことについて考察し、「評価観生成理論」とでも呼ぶべき理論の構築を行いたいと考えている。そしてそうした理論を裏づけとしつつ、各人が他者の言語運用に接する際の「評価観」を自覚できるような教育プログラムの開発につなげていくことを計画している。

■□ [03] 第 25 回大会のお知らせ ■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

【日時】2010年3月13日（土）14日（日）

(<http://www.keio.ac.jp/ja/access/hiyoshi.html>)

【交通】東急東横線、東急目黒線／横浜市営地下鉄グリーンライン日吉駅下車，徒歩 1 分。

※東急東横線の特急は日吉駅に停まりません。

※渋谷～日吉：25 分(急行約 20 分)

※横浜～日吉：20 分(急行約 15 分)

※新横浜～菊名～日吉：20 分。

◆招待講演

3 月 14 日（日）11:10 - 12:10

・ことばへの気づきを基盤とした言語教育の構想

大津 由紀雄（慶應義塾大学）

◆シンポジウム

3 月 14 日（日）13:15 - 16:25

メディア・ディスコースにおけるマルチモーダル・コミュニケーション

企画者：岡本 能里子（東京国際大学）・佐藤 彰（大阪大学）

・テレビのバラエティー番組における文字テロップ —発信する主体の複数性—

設楽 馨（武庫川女子大学）・佐藤 彰（大阪大学）

・チャットにおけるマルチモーダル・コミュニケーション

—文字による非言語情報の再現に関する日独比較—

白井 宏美（関西学院大学）

・新聞のスポーツ報道におけるアイデンティティの構築

—表記，写真を通じた意味の多層性を読み解く—

岡本 能里子（東京国際大学）

テーマ講演

・マルチモーダル・コミュニケーションへのメディア・リテラシー研究からの貢献

—「リテラシー」から「リテラシーズ」へ—

門倉 正美（横浜国立大学）

◆口頭発表

3 月 13 日（土）10:00 - 12:15

3 月 14 日（日）10:00 - 11:05， 16:30 - 17:35

◆ポスター発表

3月13日(土) 13:30 - 15:00

◆第9回徳川賞授賞式および記念講演

3月13日(土) 16:20頃 - 17:40 ※2組(約30分×2)

※プログラムの詳細は、大会委員会のホームページをご覧ください。

<http://www.wdc-jp.com/jass/25/>

■□ [04]博士論文情報 ■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

【題目】日本人英語学習者の談話標識の習得に関する実証的研究

—談話の分析から見た海外語学研修の効果—

【氏名】山本 綾

【連絡先】aya_ymmt(at)y9.dion.ne.jp(*)

【学校名・研究科名】お茶の水女子大学大学院人間文化研究科

(現・人間文化創成科学研究科)

【取得年月】2009年9月

【概要】

本論文は、英語の談話標識を日本人学習者がどのように習得するのかという点について解明を試みたものである。英語圏での6週間の研修に参加した大学生27人を対象とし、研修参加前と参加後の2時点における but, oh, well の使用状況を調査し、習得を可能にするメカニズムをめぐり考察を行った。

* * * * *

博士号を取得された方は、題目、氏名、連絡先、学校名・研究科名、取得した年月、概要(150字程度；英語の場合は50語程度)を事業委員会(jassjig2(at)gmail.com(*))にご連絡ください。ニュースレターにてご紹介させていただきます。

*(at)の部分はアドレスの自動収集を避けるために通常の記号に代えて用いています。

言語研究で本格的には議論されてきていない領域を切り拓くものと評価できる。

こうした論の中心軸を支える分析手法として、本論文は、ロジスティック回帰分析、多変量 S 字カーブ解析などを意欲的に導入したり、記憶理論を参照しつつ「形成期記憶」「生涯記憶」の概念を提案して生年や調査実施年等の調査データの新たな解釈の可能性を提示したりしている。これらは、医学、心理学、記憶理論等の他分野の成果や方法を分野横断的に言語変化研究に適用しつつ、そうした理論や方法自体の洗練に貢献するものともなっていると認められる。この点で、本論文は、トランス・ディシプリンを旨とする本学会や徳川賞の趣意に合致する。また、本論文の達成は、著者たちの先行研究（横山・真田 2007 等）の蓄積の上に立っており、試行的・萌芽的な段階を越えた本格的なものと認められ、徳川賞優秀賞にふさわしいと評価できる。

「危機言語記録保存と言語復興の統合へ向けて」

『社会言語科学』第 11 巻 第 2 号 15 頁－27 頁

パトリック ハイน์リッヒ・杉田 優子

本論文で扱っている「危機言語記録保存と言語復興の統合」というテーマは、地球規模の人の流動化の中で世界の多くの言語が危機に瀕している今、ウェルフェアリングイスタックスの観点から考えて、避けては通れない喫緊の課題ともいえる。

本論文は、この課題に対して、まず、近年の諸研究を丁寧に検討しながら、言語観のシフト（「システムとしての言語」→「実践としての言語」）、方法論上のシフト（記述言語学→相互行為言語学）、理論・実践上での焦点のシフト（単一言語社会→多言語社会）という 3 つのシフトについて理論的考察を行っている。そして、言語記録保存の方法に関する提言（条件提示）を行いながら、最終的に、言語記録保存と言語復興という現状では全く個別の領域を結び付けられるような統合的アプローチの可能性について展望した論文である。上記の 3 つのシフトに関しては、論者がよりわかりやすく図 2 「言語復興のための言語記録保存」（24 頁）の中で示しているが、これらのシフトを包括的に捉えた上での「危機言語のフィールドワーク」の推進へ向けた提案は注目に値する。なお、このフィールドワークにおいては「言語記録保存はコミュニティのニーズや期待を考慮したものでなければならず、～中略～この部分がなければ、言語記録保存と言語復興をリンクすることは不可能である」（24 頁）という考え方を基盤としている。その意味で、このフィールドワークの姿勢は、「人々の実践としての言語」の記録保存を大切にしていることが窺える。さらに、目標として「理論の専門家がフィールドに関わり、またフィールドの専門家が理論の構築に参加していけるような枠組みに関する議論展開」を掲げている。この在り方は、これまで社会言語学の立場から危機言語研究を批判してきた研究者の大半が実際にフィールドワークに関わっていなかったという経緯を踏まえると、理論と実践を結び付け、統合を図ろうとする新たな展開といえる。

また、この統合的なフィールドワークは、言語生態系の整備に向けて、言語間の競争ではなく、協調的構造を創造していこうとする超領域的な共同研究の試みであり、危機言語研究の新たな地平を拓こうとするものである。その意味で、ウェルフェアリングイステイクスの観点からも大いに評価できる。今後は、日本の危機に瀕した少数言語を中心に、地域（コミュニティ）の関心に応じて、より具体的な言語記録保存方法を実際に提案していくことが期待されよう。

これらの理由により、本論文は徳川宗賢賞優秀賞にふさわしいものである。

《徳川賞を受賞して》

横山 詔一・朝日 祥之・真田 治子

名古屋駅から 30 分ほど名鉄線にゆられて岡崎市の中心部に近づくとき、おだやかな川のほとりの緑濃い丘にそびえる天守閣が目に入り込んできます。家康公はその岡崎城で誕生しました。徳川家発祥の地における調査で徳川賞を授かったことについて、なによりも調査に御協力くださった岡崎市の皆様に心からお礼を申し上げます。また、別の歴史的側面からは、家康公と真田幸村とのかかわりが、時代を超えて学術という平和な世界でふたたび焦点を結んだという縁を感じます（私たちの一人は幸村公の家系）。

この研究は国立国語研究所の 50 年間以上にわたる経年調査の一環として実施されました。柴田武先生をはじめ、1953 年の第一次調査から 2008 年の第三次調査まで、心血をそそいでこられた歴代の研究メンバー全員の学恩に対して感謝を申します。また、井上史雄先生からいただいた「山形県鶴岡市の共通語化データも多変量 S 字カーブで解析してはどうか」というアドバイスがたいへん励みになりました。いつもは冗談ばかりの井上先生が、その時だけは怖いほど真剣だったことが今も目にうかびます。

パトリック ハイน์リッヒ・杉田 優子

比嘉光龍（ふいじゃばいろん）さんをご存知でしょうか。彼はラジオ沖縄で活躍する DJ、うちなあぐち（沖縄語）の復興活動家です。私たちの論文は光龍さんに触発されたと言っても過言ではありません。研究者の行う研究調査活動と、地元活動家の地道な努力が、あまりにもかけ離れている現状をどうにかしたいという思いがありました。徳川先生のご遺志であるウェルフェアリングイステイクスは、まさにこのようなギャップを埋めようとするものであると考えます。徳川先生ゆかりの賞をいただくことは、筆者の私たちにとって大きな励みとなるばかりではありません。新たな観点に基づく危機言語研究、復興活動の必要性が確認されたことで、将来光龍さんたちのような活動家、地域コミュニティとの連携の重要さも認識される大切な機会を得たと言えます。今回の受賞を契機に、一人でも多くの方が、復興活動へ向けた言語記録保存に関心を持ち、新たな研究の枠組みに関する議論、実践に参加してくださるようになれば幸いです。

≪著者紹介≫

【横山 詔一】

1959 年愛媛県生まれ。筑波大学大学院博士課程心理科学研究科（実験心理学）中退。博士（心理学）（筑波大学）。上越教育大学助手、国立国語研究所情報資料部門領域長、同研究所研究開発部門グループ長を経て、2009 年 10 月より同研究所理論・構造研究系教授。1997 年に日本教育工学会の論文賞を受賞。主要業績：『記憶・思考・脳』（渡邊正孝氏と共著）（2007）新曜社。『表記と記憶（心理学モノグラフ No.26）』（1997）日本心理学会。「多変量 S 字カーブによる言語変化の解析－仮想方言データのシミュレーション－」（2007）（真田治子氏と共著）『計量国語学』26 巻 3 号, 79-93. 'A logistic regression model of variant preference in Japanese kanji: an integration of mere exposure effect and the generalized matching law' (2006) "Glottometrics", 12, 63-74. RAM-Verlag(Germany).

【朝日 祥之】

1973 年愛知県生まれ。大阪大学大学院文学研究科（文化表現論専攻）修了。博士（文学）（大阪大学）。国立国語研究所情報資料部門研究員、同研究所研究開発部門研究員を経て、2009 年 10 月より同研究所時空間変異研究系准教授。主要業績：『ニュータウン言葉の形成過程に関する社会言語学的研究』（2008）ひつじ書房。'Cookbook method' and koine-formation: a case of the Karafuto dialect in Sakhalin.' (2009) "Dialectologia", 2, 1-21. 「敬語研究と実時間的言語変化研究との接点を求めて」（松田謙次郎氏と共著）（2008）『社会言語科学』11 巻 1 号, 39-50. 「海と方言－島の間の方言の伝播」（2005）『日本語学』24 巻 9 号, 50-61.

【真田 治子】

学習院大学文学部国文科卒業。日本 IBM(株)システムズ・エンジニア勤務を経て、学習院大学大学院人文科学研究科(日本語日本文学専攻)博士後期課程単位取得退学。博士(日本語日本文学)(学習院大学)。ドイツ学術交流会(DAAD)短期奨学生としてドイツ・トリア大学計量言語学科、ボッフム大学言語学研究所に研究滞在。日本学術振興会特別研究員、都留文科大学・東京学芸大学・立正大学・法政大学等非常勤講師、埼玉学園大学准教授を経て同大学教授。計量国語学会理事、国際計量言語学会(IQLA)役員。主要業績：『近代日本語における学術用語の成立と定着』（2002）絢文社。『Investigations in Japanese Historical Lexicology: Revised Edition』（2008）Peust & Gutschmidt Verlag (Germany)。「言語変化の S 字カーブ－解析手法の比較とその適用事例」（2008）『埼玉学園大学紀要人間学部篇』8 号, 1-11.

2002 年ドイツ、デュースブルク大学言語学博士号取得、同年デュースブルク大学人文
学部博士号賞受賞。2005 年デュースブルク・エッセン大学言語学教授号(Habilitation)。
現在琉球大学客員研究員。著書：*Die Rezeption westlicher Linguistik im modernen
Japan*. München: Iudicium. 編著：Patrick Heinrich & Christian Galan (eds.) (2010):
Language Life in Japan. Transformations and Prospects. London: Routledge. 主要
論文：Fija, Byron, Brenzinger, Matthias & Heinrich, Patrick (2009) "The Ryukyu's
and Japan's New, But Endangered, Languages" in: *The Asia Pacific Journal*
10-2-09, May 9, 2009 (<http://www.japanfocus.org/-Fija-Bairon/3138>).

【杉田 優子】

2003 年ドイツ、デュースブルク・エッセン大学言語学博士号取得(Dr. phil). 2009 年よりベルリン自由大学 COE 研究員. 所属はポツダム大学. 著書:*Gesprächserwartungen: Eine kontrastive Studie über die Gesprächsführung in deutschen und japanischen Telefonaten*. (2004) Frankfurt/M: Peter Lang. 編著: Patrick Heinrich & Yuko Sugita (eds.): *Japanese as Foreign Language in the Age of Globalization*. München: Iudicium. 主要論文:『『実践としての言語』の記録保存・うちなあの多言語社会再生へ向けて』(2010)パトリック・ハインリッヒ & 松尾 慎(編)『東アジアにおける言語復興』三元社.



